― 現代野球の真実 ―

51 期生

3 年A組　S.S.

なるほど！ザ･概要。

　このレポートでは、野球がどうして人気があるのか、その実態とかを調べてみました。っつか、考えました（俺なりに）。俺は、野球が好きで、ずっとやってきているのでちょっと考えてみようと思い、考えている所存でございます。プロ野球、高校野球、アマ野球の歴史をちょちょっと、探ってみたり、５１期のみんなにアンケート取って、それについて、理由とかもちゃんと聞いてあるから、考えてみたり。自分の過去なんかも紹介しちゃってます。俺が野球に惹かれていったわけ、みたいな感じで。そんなこんなで、みんながどういう風に野球を観ているのか、現代野球の真実、野球の人気の秘密、みたいなのを結果としてまとめたりしてみました。気が乗ったら見てみてください。

ビックリ！目次。

Ⅰ序論
・・・

Ⅱ本論
・・・

第一章
1、プロ野球の歴史
2、高校野球の繁栄
3、社会人野球の危機

第二章
1、アンケート結果
2、みんなの考えるプロ野球
3、燃える高校野球
4、メジャーへの憧れ

第三章
番外編
己の野球観。

Ⅲ結論・展望
・・・

第四章
1、みんなの観る野球
2、野球の人気

参考文献
・・・

あとがき
・・・

Ⅰ序論

俺は、このレポートで、野球について、題目のように「現代野球の真実」を考えてみようと思います。俺は、ずっと野球をやり続けていて野球が好きだ。だから、この野球の人気が何故高いのか、これを調べて行こうと思いました。これを見た人が、野球について、少しでも興味を持ってくれたりしてくれたら俺の喜びは絶頂に達するでしょう。さて、サッカーの人気が上がりつつある今、野球の人気がサッカーに奪われそうになっているのも事実。しかし、まだまだ野球の人気は健在です。何故なのでしょうか。まずは、国技として栄えた野球の歴史を見て行きたいと思います。

Ⅱ本論

第一章

1、プロ野球の歴史

野球は、多くの外来スポーツがそうだったように、当初はエリートのものだった。しかし、日本中に広まる中、大衆の心をとらえていくにつれて、もはや野球はエリートスポーツではなくなった。そして、柔道や大相撲が隆盛を極めていた頃から野球は「第二の国技」と呼ばれるほどの人気に達したのだった。

日本が初めて対米戦を行ったとき、まだ日本にはプロ野球というものは存在していなかった。最初は、ボロ負けもいいところだった。それでも、その人気は落ちなかった。落ちないといっても、やはり勝たなくてはおもしろくない。当然のことだ。そして、日本は全日本チームを結成した。その中には、後にプロ野球で活躍する選手がたくさんいた。その後の日米戦では、負けてはいるもののいい試合をするようになっていた。こうなってくると止まらない。そしてついに、日本にプロ野球が誕生した。当時は、球団も少なく、アマ野球の人気の方が高かったので、プロ野球は、人材集めでも、経済面でも苦戦を強いられた。

しかし、少しづつ人材も集まってきて、終戦の年１９４５年の秋に爆発的にプロ野球ブームがおこった。新球団も続々と結成され、そこでドラフト問題等も起こった。そして、セ・リーグとパ・リーグに分裂した。そうやって、今のプロ野球まで至るわけだ。

2、高校野球の繁栄

甲子園、高校野球といえば、やはり最終目標は甲子園だろう。野球をやっていない人でも、甲子園を楽しみにしている人は、多いのではないだろうか。

初めは、二県から一校が出場するという地区予選制をとっていた。そんな中、第４０回記念大会に、全都道府県から一校づつ出場することになった。今までなかなか甲子園の土が踏めなかった県の高校にも、大きなチャンスが巡ってきたわけだ。その後も何度か記念大会で一県一校制が取り入れられ、これを毎年やって欲しいという声が多くなっていた。そして、第６０回記念大会から一県一校制（北海道、東京は二校）が定着した。第８０回記念大会では、予選参加校が多い、神奈川、愛知、大阪からは、二校づつが出場した。

こうして、みんなが野球を盛り上げて、甲子園へのチャンスを広げた。もちろん、選手のやる気は上がり、レベルもあがってくる。そうすると、また盛り上がる。と、どんどんと高校野球は、人気を上げていく。

これらのことは、本当に素晴らしい事だ。しかし、近年では少子化問題によって、高校が中学生のスカウト合戦という事も起こってきた。それでもやはり、高校野球の人気は落ちる事を知らない。

3、社会人野球の危機

プロ、高校野球の盛況に対して、大学、社会人等のアマ野球の人気は、近年どんどんと乏しくなっている。その1番の原因は、東京六大学の力が平均して落ちたことだと言える。高校球児が、全国の大学に散らばるようになったのだ。野球人気の広がり、という点では悪いことはではないのだが、都市リーグのレベルが下がり、その結果、一般学生達のリーグ戦への興味は薄れていった。更には、不景気となった現代、会社がつらくなり、社会人野球ででは休部、廃部等が増えていった。野球どころでは、なくなっていたのだ。

それに、追い討ちをかけるように、サッカー、ラグビー等の他のアマスポーツが栄えてきた。それもあり、アマ野球への人気は遠のいていく。

アマ選手の中には、いい選手がたくさん埋もれている。そんな選手が活躍できずに消えていくのは悲しい。なんとか、アマ野球の人気は上がらないだろうか。

第二章

1、アンケート結果

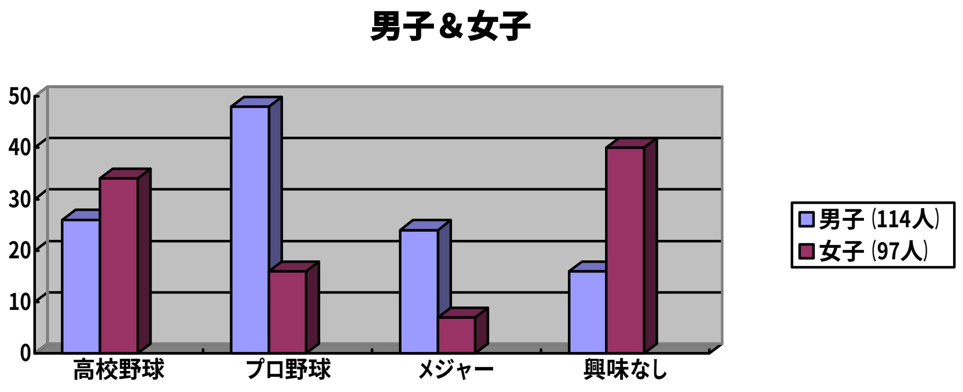
今回、今の中学生は野球について、どのようにおもっているのか、どう見ているのかということについてアンケートをとりました。

(清教学園中学校51期三年ほぼ全員　男子：114人　女子：97人　合計：211人)

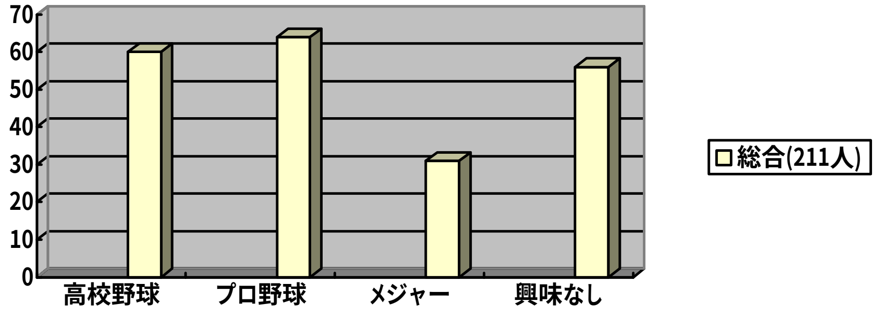
実施日：10月1日～4日

① 次のうち、1番興味があるのはどれですか？

1、高校野球　2、プロ野球　3、メジャー　4、興味なし



全体



② 好きな球団は？

ここでは、もうあえてグラフにはしない。なぜなら、圧倒的に阪神、近鉄、巨人の順で、人気が高く、他の球団は、可愛そうなほど人気がなかったからだ。ゼロという数さえもあった。さすがにそれを表記するわけにもいくまい。

では、なぜこのように偏った人気の差が生まれたのだろうか。

2、みんなの考えるプロ野球

こうしてアンケートを取ってみて、プロ野球に興味を持っているのは、男子が１１４人中４８人、４２．１％だ。女子が９７人中１６人、１６．５％だ。これだけみても、断然男子の方がプロ野球に興味を示してしる。何故、このような差がうまれるのだろうか？

まず、男子の半分がプロ野球を支持している理由を考えてみる。理由としては、見る機会が1番多い、１2球団のレベルが均等していておもしろい、たくさんの個性ある選手がいる、プロなだけにレベルが高い、長期間で見れる。というのがあげれていた。これは、ある程度野球を知っていてそのレベルの高さのおもしろさがわかっているからこそ言えることだ。つまり、男子のほとんどは、野球を知っているということだ。

対して、女子の方は、父親の影響、好きな選手がいる等、プロ野球を支持している人もいるが、時間をとりすぎでドラマ等のテレビが見れない、という風に、それを嫌う人の方が多い。これは、女子に限らず男子も思っている事だと思う。俺も、毎回見ているテレビが野球中継の延長で時間がずれたら腹が立つ。でも、それは、女子の方が強く思っているのではないか。野球にそれほど興味を示す女子もそうはいないと思う。俺も野球は好きだが、テレビ中継はあまり見ない。

好きな球団は？と聞いたところ、ほとんどが近鉄、阪神だった。次いで巨人だ。近鉄の理由は、地元だから、今年優勝したから等。阪神も地元だから、弱いから等があった。それと、親の影響を受けてファンになっているのが多いようだ。やはり、親の影響だとか地元だとか、身近にあるものを応援したくなるのは当然なのだろう。

あと、中日が好きだという理由に石井のりお先生（51期3－C副担任）が応援しているから、というものもあった。これは、ノリオ先生のファンと考えるほかないだろう。こういうのもアリだと俺は思う。

3、燃える高校野球

高校野球は、トーナメント方式で覇を争う。ひとつの敗戦で全てが終わる。残酷にも、一ミリの攻防の成否が勝者と敗者を隔ててしまうのだ。それが、高校野球の人気に最も関係しているのではないだろうか。それは、アンケートでもわかるはずだ。男子は、23.0%、女子は、35.1%だ。数字だけみればたいしたことはないようにみえるが、総合でみれば、プロ野球に次ぐ人気だ。ここでは、意外と男子よりも女子の支持の方が高い。ここが男女の差、といったところなのだろう。

なにより、高校野球は俺達により年齢が近いこと、一所懸命だということがおもしろいところだと思う。必死、青春、熱闘、感動、涙･･･いろいろな言葉があてはまるような気がする。そして、学生達にとって長期休み期間中にゆっくり見れるというのがおおきいだろう。更に、高校野球自体のおもしろさ、何が起きるかわからない。やはり、人気があって当然だ。これらは、全ての人気の理由において、男女共通している。

話題性のあるチームだとか、凄い怪物選手がいるだとか、他にも理由を探せばいろいろ出てくると思う。俺は、ある意味高校野球が日本に野球ブームを無くさないようにしていると思う。もちろん、プロの名場面もある。今年の近鉄の優勝が決まった瞬間などは、最高である。しかし、全てのプレイにおいておもしろいと思えるのは、この高校野球だけではないだろうか。選手の表情、プレイの必死さ、何事においても高校野球は見ていておもしろい。高校球児達は、みんな甲子園に向かって練習している。それが最後なのだ。甲子園のために練習している、甲子園のために時間を削っている、甲子園で勝つために汗を流し、泥にまみれ、怒られ、一時は血を流すこともあるだろう。そして、甲子園に辿り着いた時、その喜びは味わった者にしか、わからないのではないだろうか。しかし、それを制する事が出来るのは、たった一校。全国の高校から、何千校という参加校の中からたった一校だけが甲子園を制することが出来るのだ。そのためには、努力は惜しまないだろう。甲子園に出ている人間が必死でないわけがない、そこまで上り詰めてきているのだから。

長期間の努力を、その2時間程度に全てぶつける。見ていて、おもしろくないわけがない。チームが勝った時は、自分のように喜ぶだろうし、負けた時は、自分のように、涙するのではないだろうか。甲子園とは、そういうところだ。俺は、そう思う。

4、メジャーへの憧れ

今は、まだメジャーに興味を持っている人は少ないようだ。男子、21.1%、女子、7.2%。しかし、これからどんどんメジャーへの興味は膨れ上がって行くのではないだろうか。なぜなら、メジャー日本人選手が続々と増えていき、日本でのメジャー中継も増え、メジャーを知る機会が多くなるからである。

野茂投手を初め、いろいろな選手がメジャー入りを果たした。そして、日本人初の野手としてのメジャー入りを果たしたのがイチロー。次いで、新庄もメジャー入りを果たした。二人とも、おおいなる結果を残してくれた。

これまで、日米戦でしかなかなかお目にかかれなかった大リーグも、日本選手がメジャー入りを果たし、その選手の活躍を、ということでニュースでも大々的に放送されるようになった。

なにより、大リーグの魅力はその豪快さにあると思う。それに、日本人選手がどう立ち向かっていくのか､非常に楽しみである。

4、おまけ

興味がないという投票が、全体で２７．０％もあった。女子の中では、興味がないというのがﾄｯﾌﾟだった。これはちょっとばかり、ｼｮｯｸでした。(おろおろ)

第三章

番外編･己の野球観

ここでは、ちぃとばかり俺の野球人生を知っていただいて、んでもって俺がどんな感じに野球というものに関わっているのか、なんていうのを見ていこうと思います。

俺は今、中学三年生だ。そして、この中学三年間は、ずっと野球部に所属していた。小学校でも、ソフトボールを６年間やってきた。流石に小学校に入学するまでは、野球には関わってはいなかったが、ずばり野球漬けの人生だと、今この時点で言えるだろう。

小学校で、ソフトを始めるきっかけとなったのは、近所の『お兄ちゃん』だった。俺に兄はいない。だから、そういう『お兄ちゃん』的存在の人に遊んでもらうのは、とてつもなく楽しい。これは、男にしかわからないものなのではないだろうか。

そのお兄ちゃん、『まっちゃん』が子供会のソフトボール部に入っていて、俺は誘われたというわけだ。俺はもう、やる気満々だった。親にすぐ話して、小学一年生なりになんとか説得した。そして入部。そこにいるコーチ、先輩たちはみんないい人だった。そして、みんなが上手かった。俺はそれに憧れた。あの人のように上手くなりたい、みたいな。でも、当時の俺は、クソほど下手くそっぷりを発揮していた。コーチに基本を教えてもらうための近距離キャッチボール。ありえない、俺はわずか２，３ﾒｰﾄﾙの距離を暴投しまくっていた。その度にそのコーチはボールを取りに走らなければならない。俺は、それが申し訳なかったのだろう。俺は、手を抜いたのだ、下手くその癖に。その時、そのコーチを俺を怒ったというほどでもないが、注意した。『暴投してもええ、おもいっきり投げんかい。』と。俺はそれにすごく感動した。失敗を恐れず、おもいきり努力すること。あれが､今の俺を支えているのかもしれないというのは、おおげさ

だろうか。俺は、一年から入部したが、その頃同期の奴は誰一人いない。つまり、俺が１番下っ端だったわけだ。確かに、先輩たちはいい人ばかり、でも同期のメンバーがいないのは少し寂しい。俺が二年になった頃、一年の奴が一人入ってきた。それは、とても嬉しいことだった、後輩が出来たわけだから。でも、共に競い合える同期はいなかった。そんなこともあって、俺はやめたい、そう思った。でも、あれだけ親を説得して入ったので、そう簡単に辞めさせてはくれない。そのことを先輩に相談したら、親身になって聞いてくれた。『今が１番おもんない時期やろぉ、俺もそんなんあったわ。でも、これ乗り越えたらおもろなるで。』俺は、この言葉でなんとか頑張れた。

三年になって同期のメンバーが入ってきた。こうなると楽しくなってくる。ライバル心

も芽生えて、どんどんうまくなれた。その時、俺を含めて同期は4人いたが、その中でも俺と加藤というやつが、同じぐらいのレベルで競いあっていた。それこそ、守備もバッティングも似たようなもので良きライバルみたいな感じで、楽しかった。
　四年になって、その加藤が引越しするということで、ソフト部を辞める事になった。結構、ショックだった。「おいおい、ドラマ仕立てかよ」とか思っていた。今までためを張ってきた良きライバルとして、友人として、お互い頑張ってきたのに、そいつがいなくなってしまったら俺はどうなるんだろう、みたいな。でも、俺は頑張り続けた。
　ある試合で、俺は1点のビハインド、ランナーは二人いるところに、ラストバッターとして代打で起用された。俺は、めちゃくちゃ緊張していた。その頃、ずっとバッティングの調子はよかった。一球目、大空振りだ。二球目、またも大空振りだった。やばい・・・俺はそう思った。でも、みんな期待してくれている。三球目、ボールだった。ちゃんと見れた、これで大分落ち着けたんだと思う。四球目を俺は、おもいきり振った。なんとそれが大当たり。打球はセンターを越えた、俺は走る。それが、俺の「初ホームラン」、逆転サヨナラ3ランだった。とてつもなく嬉しかった。
―試合後、俺は心を躍らせながら歩いていた。すると、後ろの方で先輩の声が耳に入ってきた。「でも、アレ村上やったら余裕で捕れたよな」俺は、少なからずショックを受けた。確かに、俺は夢中で走っていたから、打球の大きさまではわからない。それにその村上という先輩はうまいし足も速い。でも、せっかく自分が必死にチームに勝利を呼び込んだのに、それを先輩に否定された。それは、ショックだった。でも、そこに、俺が1番憧れていた先輩、『大輔くん』が言った。「お前ら、そんなん言うなや。翔太せっかく打ったんやんけ。お前ら試合出れんからってそれひがむなよ」俺は、胸がつまる思いだった。とても、嬉しかった。
　俺が五年になった時は、もう『大輔くん』は、引退していたが、俺は大輔くんを目標に頑張り続けていた。
　六年では、受験のこともあって、なかなか練習にいけない日が多くなった。いろいろあった。でも、年間を通して行われるリーグ戦でホームラン賞というのももらったし、年間でチームの中で、盗塁、打率、ホームランの三冠もとった。何回かの試合で、サヨナラヒットも打てた。最後のお別れ大会でも、決勝点となるホームランも打てた。本当にいろんなことがあった。楽しかった、一言で言えばこれで片付く。
　見てもらって、解かってもらえたと思うけれど、俺は、本当に周りの人たちにお世話になってきた。多分、一人でも欠けていたりしたら、今の俺はないだろう。みんなのお

かげでここまで育ってこれた。なんだか、感動を誘っているようで趣旨が変わってんじゃないかと思われそうだが、実際こんなことがなければ今野球をやっているかもわからない。本当にいろんなことがあった。だから、俺は人一倍野球が好きなんだと思う。野球を通して多くの事を学んできている俺としては、どうしても野球を軽視するということは、出来ないのだ。誰にでも、こういうものはあるのではないだろうか。どんな些細な事でも、打ち込めることがあるのは、素晴らしいことだ。
　ここまできて、もう中学のことまでは書かないことにする。（お許しを）

III結論・展望

第四章

1、みんなの観る野球

ここまで見てきて、俺は思う。野球にも、いろんな楽しみ方があるのだと。女子がプロ野球のある球団が好きな理由は、優勝したらバーゲンセールが行われるから。というのもあった。それは、野球が好きというのとはちょっと違う気もするけれど、それでその球団を応援をする。これは、れっきとした野球の楽しみ方だと思う。そういう人もいれば、俺のように野球に思い入れがあるだとか、ただたんに見るのが好きなだけだとか、いろいろ野球の楽しみ方はあると思う。

男子の中にでも、差はある。体を動かさなければおもしろくない、つまらないというような（つまり俺のような）奴もいれば、実際に体を動かすのは苦手だけど見るのが趣味だという奴もいるだろう。女子でもそうだと思う。体を動かすのが好きな人もいいれば、見てるだけで充分。全く見ない人だって、全然おおいはずだ。でも、この世の中に生きていて、野球というものを知らない人はいないと思う。ルールだとか詳しい事は分からないにしても、野球というものの存在を知らないという人はいないと思う。

つまり、野球とは幅広い範囲で、幅広い楽しみ方がある、とても国民的な球技だということだ。

2、野球の人気

このように、野球の人気というものは計り知れないものだ。甲子園にしても、見てる観客は、親父ばかり・・・ということはないはずだ。年頃の姉ちゃんたちだって見にきている。それは、テレビで見ていてもわかる。その出場校の応援団だとか、応援しにきている学生達も、みんながみんな野球に詳しいわけはない。でも、みんな選手と同じような気持ちになって、めちゃくちゃ応援している。泣いている人だって、全然珍しくない。これは、野球と限らず、スポーツというもの全てにおいて言えることだと思うが、見ている人に何かを与えることができる。それは、感動だったり、情熱だったり、夢だったり、これもまた見る人それぞれ違うこととは思う。でも、人に感情を与えるなんてことそうそうできるものではない。だから、その人気は計り知れないものになるのだ。

野球、一番感情を与えやすく、表現しやすいスポーツなのではないか。俺はそう思う。だからこそ、俺は野球が好きだし、野球をやりたいと思う。この人気はいつまでも続くだろう。不滅ってやつです。

参考文献

二宮清純『スポーツ名勝負物語』
(講談社現代新書，１９９７)

あとがき

みなさん、こんにちは。っていうか、これを書き上げて大分疲れました。ほっとんど自分で考えて、一気に書きまくったので精神的にきました。え〜、多分こんなけの量を全部自分で考えて書いたのは、これが二回目だと思います(一回なんか書いたような気がするので)、１５年と半年生きてきた中で。

とりあえず、1番苦労したのはアンケートの集計です。あんなもん、一人で２００人もの集計なんてやるもんじゃありません。コイツに1番時間を喰われたと思います。でも、ちょっとやったかいってのもありました。みんなの野球に対する考え方とか分かったし。なにより、この考えるレポートやって1番よかったと思えたのは、自分の過去を振り返れたことかな？なんて思います。多分、これがなかったら小一の頃のことなんて思い出したりもしなかったろうから･･･

あんなことあったなぁ、なんて思ってる間に時間が過ぎていく、なんてことは流石になかったけど、いい経験になったと思います。タイピングにもチョッピシ磨きがかかったしね。

実際、このレポート読む人なんて極少数だと思うし、これを見てくれて、野球に興味をもってくれるようになる人なんていったらますます絞られてまうと思うけど、自分の意志？みたいな、自分が思ったことをまんま書けるってのは、悪いことではありません。まぁ、そんな感じでした。では、最後に一言･････

野球サイコー！･･･みたいな。

平成１３年１２月１９日
午前0時３７分